

# ちょうせんぶなど美しい小箱

小川未明

青空文庫



正 吉しょうきちくんは、はじめて小田おだくんの家うちへあそびにいつて、ちようせんぶなを見みせてもらったので、たいそうめずらしく思おもいました。

「君きみ、この魚さかなはどこに売うっていたの？」

「このあいだ、おじいさんが売うりにきたのを買かったのだよ。」と、小田おだくんはいいました。

「こんどきたら、ぼくも買かおうかな。」と、正 吉しょうきちくんは、あかずに、ちようせんぶなのダンスをするのをながめていました。「それよか君きみ、あしたいつしよに魚さかなつりにいこうね。」と、小田おだくんはいいました。

「ぼく待<sup>ま</sup>っているから、君<sup>きみ</sup>、さそつてくれたまえ。」

「ああ、お昼<sup>ひる</sup>すぎになつたら、じきにいくからね。」

ふたり  
二人は、こうおやくそくをして、正<sup>しょうきち</sup>吉<sup>きち</sup>くんはやがてお家<sup>うち</sup>へ

かえつていきました。途<sup>とちゆう</sup>中<sup>おお</sup>に大きなかしの木<sup>き</sup>がありました。その下<sup>した</sup>で、金魚<sup>きんぎよう</sup>売<sup>う</sup>りのおじいさんが休<sup>やす</sup>んでいました。

「あのおじいさんではないかしら。」と、正<sup>しょうきち</sup>吉<sup>きち</sup>くんは思<sup>おも</sup>いました。

ちかづいて、たずねました。

「おじいさん、ちようせんぶなあるの？」

たばこを吸<sup>す</sup>つていたおじいさんはにこにこしながら、

「ええ、ありますよ。」と、答<sup>こた</sup>えました。

「いくらですか？」

「三匹十銭びきせんにおまけしておきますよ。」と、おじいさんはいいました。

それを聞くと、正吉しょうきちくんは、お家へ走つてかえつてきました。

「お母さんかあ、ちようせんぶなを買うのだからお金をちようだい。」と、ねだりました。

「ちようせんぶななんてあるのですかね。」と、お母さんはおつしやいました。

「とてもおもしろいですよ。ちようどあたりまえのふなみたいなかたちで、水みずの中なかを上うへへのぼったり、下したへおりたりして、かわい

らしいのだから。」といって、小田くんのところで見てきたちようせんぶなの説明をいたしました。

そこへ、姉さんのとき子さんが出てきて、この話をききました。  
 「私も知っているわ。正ちゃんは、ちようせんぶなを買ってきてどこへ入れるつもり？」と、とき子さんはききました。

「うちの水盤の中へ入れるよ。入れてもいいだろう？」と、正吉くんは姉さんの顔を見ました。

なぜなら、水盤は自分ひとりのものではなくて、きようだいたちみんなのものであったからです。

「いけないわ。ちようせんぶななんか入れては金魚をみんな食ってしまわないの。」と、とき子さんは反対しました。

「金魚きんぎよなんか食たべるものか。」

「正しょうちゃんはまだ知しらないのよ。太田おおたさんのお家うちにもちようせんぶながいたけれど、おなかがすくと、共食ともぐいをはじめて、強つよいちようせんぶなが、ほかの弱よわいのをみんな食たべてしまったというのよ。」

「そして、どうしたの？」

「その強つよいのが、いつのまにかどこかへ行ってしまって、いなくなつたというのよ。」

「ねこに食くわれたんだね。」

「羽はねがあるからとんでいったんだって、太田おおたさんがいつていたわ

。」

こんな話をきくと、正吉くんは、なんだか自分にもいやな魚のように思えたけれど、またそれだけかってみたいという気もおこりました。

「ぼく、水盤に入れなければいいだろう。ほかの入れものに入れておけばいい？」

「だって、そんないやな魚なんか、私、かうのはきらいだわ。」  
と、とき子姉さんは、正吉くんのいうことに賛成しませんでした。

これをお聞きになったお母さんは、  
「おなかまを食べてしまうようなお魚なんか、よしたほうがいいでしょう。」とおっしゃいました。

正 吉くんは金魚売りのおじいさんが、自分がひつかえし

てくるかと思つて、ゆるりゆるり歩いておるすがたを思いうかべ

ると、早くいつてやりたいので、だだをこねました。

「正ちゃん、そのかわり姉さんのだいじな、きりの小ばこをあげ

るわ。」と、とき子さんがいいました。

「え、あの小ばこをくれるの？」

正 吉くんが目をまるくしたのも道理です。とき子姉さんの

持つている美しいきりの小ばこが、前から正 吉くんはほしく

てならなかつたのです。それで、これまでたびたびほしいといっ

たのですけれど、姉さんはくれなかつたのでした。

「ほんとうに、くれるの？」と、正 吉くんは、念をおしまし

た。

「ええ、いやなちようせんぶななんかかわなければね……。」「と、とき子こねえ姉さんはいったのであります。

「ぼく、小こばこをくれれば、ちようせんぶななんか買かわないよ。」と、正しょうきち吉くんはやくそくをしました。

「正しょうちゃんこは小こばこをなににするつもり？」

「ぼくのいちばんいいものを入いれるんだよ。」

「正しょうちゃんこのいいものって、なあに？」

とき子こさんは自分じぶんのおへやから、だいじにしていた美うつくしい小こばこもを持つてきて正しょう吉きちくんこにくれました。

ところが、正しょう吉きちくんこのるすのときでありました。お母かあさん

が、

「なんだろうね、この茶ちやだんすのあたりで、ガサガサいうのは？」  
と、おつしやいました。

とき子こさんがわらいながら、

「昼間ひるまからねずみは出でませんから、なんでもないでしょう。」  
と、いいました。

「いいえ、さつきからガサガサといっていますよ。」

そうお母かあさんにいわれてみると、とき子こさんも、さすがにうすきみ悪わるくなりましたが、なんでもないのだと思おもって茶ちやだんすの上うえを見みたり、戸とをあけて中なかを見みたりしました。茶ちやだんすの上うえには、自分じぶんがきのう弟おとうとにくれてやうつくった美しい小こばこがありました。

「ねえ、お母<sup>かあ</sup>さん、正<sup>しょう</sup>ちゃんが、なんかこのはこの中<sup>なか</sup>に入<sup>い</sup>れたの  
ではないでしょうか？」

「さあ、あの子<sup>こ</sup>のことだからわかりませんよ。」

とき子<sup>こ</sup>さんは小<sup>こ</sup>ぼこを取<sup>と</sup>つてふたをあけて見<sup>み</sup>ますと、中<sup>なか</sup>からま  
つ黒<sup>くろ</sup>な虫<sup>むし</sup>が<sup>で</sup>出てきました。

「かわいいそうに、かぶとむしがはいっていますのよ。」

「まあ、そうなの！」

そのはこの中<sup>なか</sup>には白<sup>しろ</sup>ぎとうが入<sup>い</sup>れてありました。

ちようど、そこへ正<sup>しょう</sup>吉<sup>きち</sup>くんがかえつてきて、お姉<sup>ねえ</sup>さんにし  
かられると、

「だって、かぶとむしは、くらい地面<sup>じめん</sup>の穴<sup>あな</sup>の中<sup>なか</sup>にはいつているだ

ろう。」と、こた答えました。

「じゃ、このはこは、かぶとむしのお家のつもり？」

「ぼく、かぶとむしが大だいすきだから、美うつくしい御殿ごてんにしてやったのだよ。」

「はこの中なかでは、息いきができないでしょう。かぶとむしには、このはこが御殿ごてんではなくて、牢屋ろうやなのよ。さつきから苦くるしそうにもがいていたわ。」と、お姉ねえさんがいいました。

「もがいていた？」と、正しょうきち吉くんは目をみはりました。

そして、正しょうきち吉くんは、かぶとむしをにがしてやろうと、森もりの中なかへいききました。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷

1983（昭和58）年1月19日第6刷

※表題は底本では、「ちようせんぶなと美《うつく》しい小箱  
《いばい》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2015年5月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# ちょうせんぶなと美しい小箱

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>